



学校事例 ①

北海道 地区

北海道
札幌市立東札幌小学校

「熱中」でできる授業を通して 明日の登校が 待ち遠しい学校に

どんな大人になってほしいか



- 夢をもち、その実現に向けて熱中できる人
- 自分をもち、社会がどのように変わってもくじけずに生き抜いていける人
- 自分を大切にしながら、周りの人や社会とのかかわりの視点も大切に出来る人

そのための小学校の役割



- どんな子どもも、夢や希望をもち、努力によって実現が可能なのだと感じられるようにすること
- 「当たり前なこと」を当たり前に来るようにすること
- 「あの学校に行けば大丈夫」と保護者に信頼を寄せてもらえるような学校にすること

未来に残したい 東札幌小学校の力強さ

- ◎ 「どの子どもも希望をもてる学校に」という信念に基づき、「熱中できる授業づくり」など、複数の新たな取り組みを導入。「この学校はそういう学校だから仕方がない」という雰囲気を、教師の力で変えていった
- ◎ まず校長がビジョンを提示。教頭、教務主任と共に「30～40点から始めよう」と語り掛け、取り組みを開始。実践を進める中でより良い形を教師全員で模索している



札幌市立東札幌小学校
三高純子
Miyaaka Junko

札幌市立東札幌小学校
研究部長、5学年担任。「今日の自分は昨日より少しでも良くなりたい。情熱をもって、教師を続けたい」



札幌市立東札幌小学校
山元朗
Yamamoto Akira

教務主任。「人とのかかわりを大切に、愛情や感謝の気持ちをバトンのようにつなげられる子どもを育てたい」



札幌市立東札幌小学校教頭
松田昭雄
Matsuda Akio

「子どもにはもちろん、学校を取り巻く保護者・地域住民、そして教職員に誠意をもって接する」



札幌市立東札幌小学校校長
中易まさき
Nakayasu Masaki

「明日は今日より必ず良くなると信じ、諦めずに小さなことにも粘り強く取り組む」

School Data

設立 1965 (昭和40) 年

校長 中易まさき先生

児童数 563人

学級数 21学級 (うち特別支援学級3)

所在地 〒003-0004

北海道札幌市白石区東札幌4条5丁目4-20

TEL 011-821-6333

URL <http://www.higashisapporo-e.sapporo-c.ed.jp/>

公開研究会 「平成26年度 開校50周年記念教育実践発表会」開催予定



校門を一步入ったら どの子ども希望をもてる学校に

札幌市立東札幌小学校の中易まさき校長は、毎朝、校門で子どもを出迎える。元気にあいさつをしてから校内に入る子どもがほとんどだが、中易校長が赴任した1年前は、少し様子が異なっていた。うつむいてボソッとあいさつをしたり、元気のない表情で登校したりする子どもが少なからずいたのだ。

同校の子どもはとても素直で、教師が真剣に向き合い、真摯に語り掛ければ心を開いてくれると、教師は口をそろえる。しかし、校区に繁華街を抱え、基本的な生活習慣や学習へ向かう姿勢が身に付いていない子どももいた。そのためか、同校に対する地域や保護者の評価の中には厳しいものもあった。教師も生徒指導などに疲れ、「この学校はそういう学校だから仕方がない」といった雰囲気も漂っていた。中易校長は次のように振り返る。

「校内に一步入ったら、そこからは学校の責任です。たとえ家庭で嫌なことがあっても、『友だちに会える』『あの先生がいる』『今日は〇〇を頑張ろう』といった前向きな気持ちで校門をくぐり、にこにここと全員の笑顔が輝く学校にしなければならぬと、強く感じました」

その思いを表した2011年度経営重点目標が「夢ふくらむ東札幌！ 笑顔かがやき、心ときめき！」だ。松田昭雄教頭は次のように説明

する。

「全ての子どもが希望をもち、自分のしたいことや夢を実現できるように、子どもも教師も『明日、学校に行くのが待ち遠しい』と思う学校にしようと、7つの視点(図)で教育活動を見つめ直しました」

検討に当たり、前年度末、中易校長は26枚にも及ぶ学校経営方針を教師に示した。それを松田教頭や教務主任の山元朗先生が各部会の教師に伝え、7つの視点にまとめ、新たな日課表に具現化した。7つの視点には、子どもの学び、心や体などの育成と共に、教師の成長や保護者・地域との連携なども含まれる。子どもを変えるには、教師自身や子どもの生活習慣などの変革が必要という考えがあるからだ。

全ての子どもが 「熱中」する授業を目指す

7つの視点に伴う教育活動をいくつか紹介する。

②学びを鍛える」の視点から、11年度に「チャレンジタイム」を始めた(P.10写真)。毎日、中休み後の10分間に漢字練習や計算練習などを行い、基礎・基本の習熟を図る。

「子どもが生き生きと授業に参加するには、基礎的・基本的な知識・技能

図 経営重点目標の具現化のための7つの視点

経営重点目標 「夢ふくらむ東札幌！ 笑顔かがやき、心ときめき！」

視点	内容	実践例
視点 1	新たな東札幌の教育の創造 新たな発想と理論に裏打ちされた教育課程の編成・実施・評価・改善	「チャレンジタイム」などを含めた日課表の改善、評価
視点 2	学びを鍛える 基礎的・基本的な知識・技能の習得と「自ら学ぶ力」の育成	「チャレンジタイム」、「ふれあいタイム」
視点 3	心を鍛える かかわりの中で、互いに思いを通わせる「しなやかな心」の育成など	清掃活動等、体験的活動の充実
視点 4	体を鍛える 折れない強い意志と、「たくましい体」の育成など	「東っ子タイム」、運動習慣づくり
視点 5	人としての力を鍛える あたたかな人間関係を育む。厳しさと温かさのある学級経営など	異学年交流の活性化、児童会活動の充実
視点 6	教師力を磨く 専門性を高める研究・研修の充実と統一的な取り組みの推進など	「熱中」をキーワードとした授業研究
視点 7	共に育てる 地域・保護者との新たな連携と教育力の活用など	学校の教育情報・教育活動の積極的な発信

の十分な定着が不可欠です。『チャレンジタイム』は、この定着と共に『自ら学ぶ力』の育成を図る取り組みです。1日10分ですが、1年間では約35時間もの学習となります(松田教頭)。「チャレンジタイム」に加えて、中易校長は、高学年でかけ算などが出来ない子どもを校長室に呼び、自ら個別指導することもある。

*同校の資料を基に編集部で作成



写真 「チャレンジタイム」に取り組む子どもたち。この時間になると、使用するドリルを机の上に出して待つようになった。学習習慣の確立にも良い効果をもたらしている

「担任だけではどうしても見取り切れないこともあります。教室の中で分からないのに黙って我慢しているだけの子どもも、一対一で教えると、簡単な問題であっても、解けるととてもうれしそうな顔をします。次第に自信を付け、学習に前向きに取り組むようになります」(中易校長)

基礎・基本の定着との両輪で、同校が目指すのは「どの子どもも熱中できる授業づくり」だ。これは「⑥教師力を磨く」の視점에当たる。研究部長の三高純子先生は、次のように話す。

「授業は学校生活の基本です。どんな子どもでも、夢中になる授業、『楽しかった』と言う授業にしたいと考えました。目指す授業像を本校の子どもの姿で考え、研究授業で語り合う中でよく出てきたのが、『熱中』という言葉でした。そこで、11年度はテーマを『熱中探しの旅』として、校内研究を進めています」

子どもが、そして教師も熱中する授業づくりのために、主に三つの要素を「探す」。一つめは、「真の熱中」といえる子どもの姿だ。学期に1回、「熱中交流会」を開き、「子どもはどのような場面で熱中したか」「熱中した時に、子どもにどのような表情や行動が見られたか」などを伝え合い、目指す子ども像を共有している。二つめは、「熱中の源」となる学習課題だ。内容や提示の方法を検討する。三つめは、どのタイミングで学び合いの場を設けるかなど、「教師のコーディネート」のあり方だ。

『熱中』という本校の子どもに即した言葉を使うことによって、一人ひとりの興味を引き付ける授業づくりについて具体的に考えられるようになりました」(三高先生)

「東っ子タイム」で 頭と心と体をすっきりと

「チャレンジタイム」は1週間で50分間となり、1コマ分、日課表の中に学年・学級が自由に使える枠が生み出された。この時間を使って、

「②学びを鍛える」の視点から、木曜日の6時間目に学年・学級担任が自由に使える「ふれあいタイム」を設けた。

「先生方が子どもと向き合う時間を増やしたいというねらいです。子どものことをよく分かっているといないと、子どもに寄り添う授業づくりも出来ません。担任が自由に内容を決めて、教師と子どもが交流する時間になっています」(松田教頭)

算数が苦手な子どもを集めて教えたり、学年集会を開いたり、学年・学級によって活動内容はさまざまだ。今後は子どもが活動内容を企画し、より自主的な活動にすることも考えている。

「東っ子タイム」は、「④体を鍛える」の視点で取り入れた。朝8時から15分間、校庭で爽やかな汗を流せる時間で、キャッチフレーズは「朝日を浴びて、頭と心と体をすっきりと」だ。山元先生はこの時間の意義を次のように説明する。

「就寝時刻が遅く、朝、学校に来てもぼんやりしている子どもが多かったのですが、『東っ子タイム』で体を動かすことで、午前中の授業でも活動的になったり、朝ごはんを食べるようになり生活習慣が整ったりする子どもが増えました」

「困った」「大変」「難しい」と 教師が言わない

11年度に新しい取り組みを次々と始めたが、

そのためにはまず、校内の雰囲気や考え方をプラス思考に変える必要があったと、山元先生は話す。

『口癖のようにならなっていた』『困った』『大変』『難しい』という言葉や、教師が言わないようにしようと呼び掛けました。後ろ向きな雰囲気は子どもに伝わり、『やっても無駄だ』といった気持ちにさせてしまいます。『困った』『大変』と思うところこそ、教師が向き合うべき仕事ではないか。『このままではダメだ』と思った人が声を上げ、前向きに取り組む雰囲気をつくるべきだと考えました』

「産みの苦しみ」もあったと、山元先生は続ける。『初めての取り組みはどうしても不安になります。『本当に効果があるのか』『忙しくなるのではないか』といった声がありました。しかし、私はこの取り組みによって変わる子どもの姿を心に描きました。そこで、『最初から100点ではなく、まずは30〜40点を目標して取り組んでみましょう』と校長、教頭と共に声を掛け、少しずつ工夫を加えながら前に進んできました』

「チャレンジタイム」は、導入当初、学級によって取り組み姿勢に差が見られたが、1学期の終わり頃にはどの学級でも学習に向かう姿勢が定着し、集中力が高まった。例えば、週3回、朝の活動として行う「読書タイム」でも、自然と子どもが積極的に本を選び、集中して読むようになった。授業でも集中力を発揮する子どもが増えている。また、「東っ子タイム」によって

校内に活力が出てきた。こうした子どもの変化をきっかけに、現在は教師の意識も前向きに変わってきている。三高先生は言う。

「この学校に赴任して4年が経ちますが、子どもは4年前の姿とは全く違います。学びに向かえなかったのは子どものせいではない、子どもはいくらでも変わることが出来る。自信をもって言うことが出来ます」



中易校長が子どもに願うのは、次のようなことだ。

「今後、社会がどのようなふうになるか、自分らしさを忘れず、くじけずに生き抜いていく人を育てたいと思います。また、

山元先生はたびたび、子どもに「一日一生」という言葉について話をする。

「まず夢をもつことで、その実現に向けて今の自分を大切にしたいと思っています。『一日一生』は、毎日を生懸命に生きていくという意味です。そのような学校生活の積み重ねによって、一人ひとりの良さが膨らんでいくのではないかと思います」

松田教頭は、子どもの未来を見据えて次のように話す。

「自分の特長を生かし伸ばすだけではなく、別の世界の人のつながりを大切にしてほしいです。多種多様な経験や触れ合いをもつことで、道は開けていくものです」

同校の改革は道半ばにある。地域、保護者、児童、教師によるアンケートで、マイナスイメージを含めた取り組みの総括をし、次年度の方針を立てる予定だ。加えて、これまでは中易校長が主導し、松田教頭や教務主任の山元先生を中心に、新しい取り組みを浸透させてきた。これからは、教師一人ひとりから「マイプラン」としてアイデアを募り、改革を続ける考えだ。

「どの先生にも、『こんな子どもを育てたい』という思いがあります。うれしいことに『東っ子タイム』にポイント制を取り入れてはどうかと、ある先生から提案がありました。全ての先生が学校経営にかかわりアイデアを出してもらうことによって、本校はもつともつと良くなっていくはずですよ」(中易校長)